

詩集

むすめ

娘
への
レター

Love letter

to daughter

正道

SEIDOU



目次

娘へのラブレター	
はじめに	3
もくじ	3
第1章 恋しい人に	
今だけは	5
本当の勝者	5
二度目の初恋	6
最愛の恋人	7
ためらいなどなく	8
本当にいいの？	9
うぬぼれ	10
愛したいだけ	10
君との結婚	11
第2章 父親として	
だっこ	13
生命をつなぐ	13
てんびん	14
結婚式では	15
ひとつの覚悟	15

父性愛と母性愛	16
逃げ足	17
負けられない	18
笑顔でバイバイ	18
第3章 夜の歌	
ぬくもり	21
夜の神殿	21
音と温もり	22
夢のなかへ	22
第4章 おもいで	
通夜の日に	25
退いていく波	27
熱性けいれん	27
歴代誌	30
第5章 詩人として	
詩のミューズに捧げる歌	33
創作の泉	37
第6章 愛しい君へ	
学びの場	40
そのときまで	40
君の信頼	41
走れ！	42
君が笑うと	43

心を広げるもの	43
君の顔	44
恋文	45
変わるものと変わらないもの	48
世のお父さんたちへ	48

娘へのラブレター

はじめに

私には三人の娘がいます。この詩集は、そのなかの長女が三歳だったときに編んだものです。

その娘が来年には成人式を迎えるのですから、ずいぶん古い作品であると言えばそのとおりです。

けれども断言できるのは、当時の想いは、いまでも全く色褪せていないということ。そして、この詩集が、私にとって、生涯のおわりまで、大事なものであり続けるということです。

ここには、おそらく「父親というもの」の本質的な心情が描かれています。

だから本書は、まず私以外の「お父さん」に読んでいただきたいし、その次には、かつてか今か「父親の娘」としての経験を持つ、女性たち全てに読んでほしいと思います。

もちろん、そうなる、ほぼ「女性すべて」にはなってしまうのですが（笑）きっとその全ての女性が、今まで考えたこともなかった「父親の本心」に、本書のなかで初めて出くわすことになると思います。それがどんなものであるかについては、実際に読みながら感じ取ってみてください。決して長い作品ではありませんから、きっと負担にはならないでしょう。どうか、皆さまにとっても、本書が「大事なものの」になってくださいますよう。

この世に数多い父親の一人より

もくじ

第1章	恋しい人に
第2章	父親として
第3章	夜の歌
第4章	おもいで
第5章	詩人として
第6章	愛しい君に

第1章 恋しい人に

今だけは

君と同じぐらいの年頃の男の子を見て、
パパの目から見ても、

「お、かっこいいな」と思うことがある。

でも君は、そんな子には関心を持つこともなく、

「パパー」と呼びながら、

一直線に、こっちに向かって走ってきてしまう。

いまの君にとっては、

パパよりも大切に思える男の子は、

きつと、ただの一人もないんだよね。

パパはいま、君にとって最愛の異性なんだよね。

そう、今だけは。君がおさない今だけは。

ああ、このまま時間が止まってしまえばいいのに。

「時よ止まれ、お前は永遠に美しい」

——ゲーテ『ファウスト』より

本当の勝者

君は泣きながら

「パパが大好きなの」って言ってくれる。

パパは泣いたりしないけど、

でも真実、君の百倍も千倍もの強さで、

君のことが大好きなんだ。

ハハ、君なんか、

とてもじゃないけど勝てないよ。

二度目の初恋

自分でも呆れるほど君のことが好きなのに、
そして君は確かに女の子なのに、
君に対する性欲というものは、

——当然と言われれば、それまでだけど——
全くと言っていいほど湧いてこない。
この感じ、何かに似ているんだ。
なんだろう。なんだろう。
そうだ、思い出した、初恋だ。

相手の女の子に憧れるあまり、
異性に対して、持っていて当然の性欲さえ、
全く覚えがないぐらいに忘れてしまう、
そう、あの不思議な感じに似ているんだ。

もし恋している女の子の体まで欲しかったなら、
そんなの大した初恋じゃない。
初恋の本質は憧れだから、
もし真に、初恋のさなかにあったなら、彼は、
彼女を性的な眼差しで見ること自体を、
不敬虔なこと、冒瀆的なこととして、
厳しく罪惡視せずにはいられないに違いない。
実にそれこそが、その感じこそが、
彼の初恋が、まさに純粹な初恋であることの、
証じゃないだろうか。

——何故だかは分からないが、
二度目の恋からは、人は憧れや幻想以外の、
俗っぽい現実も眺めない訳にはいなくなる。
だから自分の中にある性欲も認めるし、
それゆえ彼女の肌に触ってみたいとも思うし、

彼女の体を抱いてみたいとも思う。

でも初恋は違う。初恋だけが違っている。
初恋は現実を超えてしまっている。

それは天国を見上げるような憧れの恋。
それは天国にいるような幻想の恋。

そして君よ、パパもまた昔々に初恋を経験した。
その初恋も、やっぱり憧れと幻想に満ちていて、
どこまでもキレイで、どこまでも特別で、
だからもう二度と、あの時と同じ想いを、
経験することはないだろうと思っていた。

だけど君に出会って、

パパは二度目の初恋をした。

あの特別な恋を、再び味わった。

いや、まさに今、それを味わっている。

パパは君に初恋をしている。

幻想のような恋をしている。

君に憧れている。

そして、それは、

`/everypar{\null}`「好き」の最上の表現なんだ。

最愛の恋人

誰かが言ってた。

娘というのは、父親にとって、
永遠に結ばれることのない、

最愛の恋人なんだって。

この言葉を語った人にも、
きっと娘がいたに違いない。

そして彼もやっぱり、
パパと全く同じように、
ナイフで胸を抉られるような、
そんな痛みにも似た寂しさを、
感じていたんだろうね。

ためらいなどなく

どうしてだろう。不思議なことに、
これっぽっちも自分を疑うことなく、
ごくアッサリと、

こう確信することが出来るんだ。

もし君が、死ぬほどの危機に陥ったとしたら、
そのときパパは、何をためらうこともなく、
きつと君の盾になって、あるいは、

君の代わりになって死ぬことだろう、と。

神さまに誓っても構わない。

この言葉に、一切いつわりはない。

だって君の命は、

パパの命なんかよりも、ずっと重いから。

いや、そんなことを考えることもなく、

君の命が危なくなったら、

パパの体は、勝手に動いてしまうだろうから。

君を助けるために、君を救うために、

パパは自動的に動いてしまうだろうから。

それで君が助かるのなら、パパは、たとえ自分が死んだとしても、そのことを一切後悔しないだろう。だって、そのときに死ねば、パパは地獄に行かずに済むんだもの。パパはいて、君はいない世界、そんな世界こそが、地獄と呼ばれて然るべき世界だもの。

本当にいいの？

君に「パパ」と呼ばれるたび、僕なんかが君の父親で、本当にいいんだろうか、って思う。そう思わずにいられないぐらい、君はキレイで、無垢で、また天使のように愛らしい。

でも君の目はまっすぐに僕を見て、君の口もととはためらいもなく、僕に向かってニッコリと笑う。それを見て、僕は心から安んじて、まるで何事もなかったかのように、いつものように君の名前を呼ぶ。

うぬぼれ

そんなにパパの傍がいいの？
そんなに引っ付いても、
何もいいことはないだろうに。
それとも、いい事があるんだろうか。
僕は自惚れてもいいんだろうか。
僕のそばにいること、それ自体が、
君にとっては幸せなことなのだ。

愛したいだけ

「そんなに娘を可愛がったって、
どうせ、結婚したらいなくなるんだぞ。
だったら、
そんな無駄な愛情は注がないほうがいい」
こんなことを言われたことがある。
けれど僕は、君にお返しをもらいたくて、
君に愛情を注いでいる訳じゃない。
君が愛しくて、
愛情を注がずにはいられないから、
ただそれだから愛しているだけなんだ。
僕に君を愛することを禁じたならば、
それこそ重症のノイローゼ患者をひとり、
世に送り出すことになるだろう。

愛したいのに愛さないのは、
強烈なストレスだ！

君との結婚

本当は君と結婚したかった。

ハハ、馬鹿みたいな話だけど、

男親ってのは、

けっこう、この馬鹿な考えを持つものだ。

だって最愛の女性と結婚したいというのは、
男として、いだいて当然の望みだもの。

いや、そんなことが成立しないのは、
理性的に考えれば分かることなんだ。

だってママと結婚していなかったら、

そもそも君とは出会っていなかったんだし、

それに、たとえ君と結婚したところで、

いわゆる夫婦生活なんて送れるはずもない。

だから、この気持ちの本質は、

君と結婚したいという、この気持ちの本質は、

煎じ詰めれば、

要するに、こういう事なのだろう。

「大好きな人と、いつまでも一緒にいたいんだ」
という。

第2章 父親として

だっこ

君を抱っこすると重い。
でもすごく気持ちいい。
その重みが気持ちいい。
親として、子供を支えている実感、
君のために生きているという実感、
抱っこは、そんなものを教えてくれる。
君の重みが、そんなものを教えてくれる。
ああ、人生に責任を持って生きられる幸せよ。

生命をつなぐ

結婚する前、
子供が欲しいなんて思ったことは、
正直一度もなかったけれど、
君が生まれたことで、
生命をつなぐことの喜びを、
それ以上に大切なものは、
何も無いというほどまでに、
心の底から、しみじみ味わった。

そう、君は僕の未来で、
僕は君の基盤なんだ。
つながることで生命は、
伸びやかで確かなものになる。
それは人の意識は知らなくても、

血と体と遺伝子とは、
はるか昔から知っていた喜び。

てんびん

君を一生手放したくないと思う。
君に恋しているのだから、
そう思ったとしても当然だろう。

結婚なんかさせたくないと思う。
君が僕以外の誰かを好きになるなんて、
パパにはとても耐えがたい。

それは恥ずかしいけれど真実の思い。
とても強く望んでいる、偽りない思いだ。

けれど、けれどその思いを、その日、
僕は悶々としながらも、
きつと最終的には投げ捨てるのだろう。
君が結婚する、その日、に。
だって、パパが幸せであることよりも、
君が幸せになることのほうが、
ずっとずっと大切なことだから。

結婚式では

君の結婚式で、パパは泣くのかな？

パパのお父さん、

つまり君のおじいちゃんは、

三人いる娘たちの結婚式の、

その全てで、

まあ見事なくらい、

大粒の涙を流していた。

ママのお父さん、

つまり君の、もう一人のおじいちゃんは、

パパとママの結婚式の翌日に倒れてしまった。

よっぼと娘と離れるのが寂しくて、

よっぼどその日がショックだったのだろう。

じゃあパパは？ ……パパは……

いや、考えても仕方ない。

考えずとも、

その日は確かにやってくるんだ。

ひとつの覚悟

パパは常に、肝に銘じている。

君に嫌われることを、

絶対に恐れてはならないと。

もし君に好かれようと思って、

君の望むままに、

君を甘やかしてしまつたら、

それは駄目、

あるいは教育の欠如となり、

君が人間として成長することを、

不当に抑え留めてしまうことになる。

君への愛ゆえにこそ、

そんなこと、パパには出来ない。

だから君を心から愛しているパパは、

たとえ君に嫌われようとも、

ときに君に厳しく接しなければならぬ。

嫌うなら嫌ってもらつて結構。

君にどう思われようとも、

パパは、君への愛を貫くだけだ。

父性愛と母性愛

男は、自分の死を見つめて生きる生き物だから、

僕もまた、自分が死んで居なくなつたときの、

君のことを、どうしても考えてしまう。

つまり親の保護を失つた君のことを、

どうしても考えてしまうんだ。

それだから将来、

君が、親の支えがなくても生きていけるぐらい、

しっかりとした見識と精神力を持てるように、

たとえ他人から「厳しい」と言われようとも、

確固たる教育を与えずにはいられない。

これをもって父性愛という。

女の魂は、母から自分、

自分から娘へと受け継がれて、
生き続けて、
決して死ぬことがない。
ゆえに彼女は、
自分の死による別れ、
死による「子供との別離」を
決して受容することなく、
そのため、その愛はつねに、
自分と我が子を結びつけようとする。
だから彼女の愛はいつも優しい。
無限の優しさ、
永遠の優しさと言っているだろう。
これをもって母性愛という。

父性愛と母性愛、
厳しい愛と優しい愛、
この二つの愛が両輪となって子供を乗せ、
家庭生活という名の道を進む時はじめて、
子供の心を真っ直ぐに育てる、
親の愛となる。

逃げ足

君は走るのが早いから、
パパ以外の家族は、
君の逃げ足に追いつくことが出来ない。
でもいつかは、
パパも、君に追いつくことが出来なくなる。
しかも、それと時を同じくして、
君はパパはら遠く離れていく。
誰かと一緒に。

負けられない

会社から二キロほど離れた場所には、君が通っている保育園があつて、パパが会社で働いている時には、君は、その保育園で遊んでいる。

親がない場所で、親の保護がない場所で、頑張つて遊んでいる。

パパは仕事で面白くない事があると、二キロ離れた所にいる君のことを思う。そこで頑張っている君を思う。そして思う。君が頑張っているのに、親の自分がへこたれてなるものかと。

笑顔でバイバイ

保育園に通いだした頃、園に送るパパにしがみついて、君は「ヤダ、行っちゃヤダ!」と泣いていたね。僕と離れたくなくて、とても悲しそうに。

でも最近は、

同じ場面にあっても、

笑顔を見せながらパパにバイバイするし、
家に帰ってきてても、

君は本心から、

「先生のが大好きなの」

と言ったりする。

まるで僕だけの君では

なくなってしまったかのように。

でも君の寂しさが薄れるのなら、

パパの存在が薄れる事なんて、

そんなの全く、とるに足らない事だ。

本当に良かった。

慣れたんだね。楽しいんだね。

第3章 夜の歌

ぬくもり

一緒に眠っていると、
染みるように伝わってくる、
君のぬくもり。

そのぬくもりが、たまらなく嬉しい。

君の寝息が、僕の頬にかかる。
その密やかな風が嬉しい。

君の髪の毛の匂いが、
かすかに僕の鼻先をかすめる。
その温かな人の匂いが嬉しい。

そんな心地いい夜も、
やがては終わりを迎えるけれど、
朝になれば君の笑顔が、
また僕を迎えてくれる。

その僕を信じきった笑顔が嬉しい。

夜の神殿

一緒に寝ようと誘われると、
神殿に導かれる信者のように、
喜びに陶然となりながら、
僕は君の臥所へと入っていく。

抱っこしてと頼まれると、

僕は女神に触れるかのような、
清く敬虔な思いに震えながら、
おずおずと君の背中に手を回す。

いつしか君の寝息が聞こえてきて、僕は、
至高の讃美歌を聴くようにして、
恍惚となりながら、
とこしえに深い眠りにつく。

おお神よ、
これほどの贅沢がありましようか。
これほどの感動がありましようか。

音と温もり

君はいま、
僕の隣で眠っている。
その寝息は、
どんな音楽よりも、
僕の心を豊かにしてくれる。
その柔らかな温もりは、
どんな大きなストーブよりも、
僕の心を、
芯から温めてくれる。

夢のなかへ

もっと安らいで眠ればいいのに、

どうして、そんな苦しそうに、
泣きながら寝言を言うんだい？

本当にどれほどの、

悪い夢を見ているの？

ああ、パパが君の夢の中に入れるならば、
君を苦しめているのが何者だろうと、
すべて残らずやつつけてやるのに。

けれども君は、

パパがギュッと抱きしめてやると、

ホッとしたように寝言を言うのをやめる。

僕には分からないけど、

もしかしてパパは、

君の夢に入っていたのかな？

そこでパパは、

一体何をやってるのかな？

ちゃんと君を守れているのかな？

第4章 おもいで

通夜の日に

今日ある人の通夜に参列した。
僕は生まれてはじめて、
焼かれて灰になった骨を見た。
その骨を、長い木箸で挟んで、
鈍く光る骨壺の中に入れては、
太い棒を使って押しつぶす。

ボキボキ言いながら、
ゴリゴリ言いながら、
骨は、粉へと変わっていく。
ただの灰へと変わっていく。
その灰になった骨を眺めるほどに、僕は、
人の命の無常と、また、
無情とを感じずにはいられない。

おお君よ、僕は君に、
君の命が始まる時を与えた。
そして、始まりを与えたということは、
すなわち、
それが終わる時をも、
併せて与えたということだ。
終わりのない始まりはないから。

ゆえに君もまた、
いつかは灰になる。
ただの白い灰になる。
成長し、衰えて、
死んで灰になる。
無常にして無情に。
ほとんど虚しいぐらいに。

もしかしたら君は、

灰になるだけの運命ならば、

どうして私を生んだりしたの？

そうパパやママに問うかもしれない。

けれどパパもママも、

その問いに答えることは出来ない。

しょせんパパやママも、

君とまったく同じように、

やがて灰になるだけの、

ちっぽけな命に過ぎないから。

そんな大それた問いに、

答えることは出来ない。

ただ君よ、

君が将来こどもを生んで、

その命を未来につないだとき、

もしかしたら、

求めていた答えが見つかるかもしれない。

それは、

上手に言葉に出来るような、

明確な答えではないだろうけれど、

それでも、腑に落ちる、ような何かを、

君に与えてくれるに違いない。

それだけは確約することが出来る。

だって僕たちもまた、

かつての日、

君を生んだことによって、

その答えを得ることが出来たんだもの。

退いていく波

はじめて一緒に海へ行ったとき、
波打ち際で遊んでいた君は、
とくに退いていく波に喜んでいた。

たしかに不思議な感じがするよね。
血の気が引いていくような、
時間がずっと過ぎていくような。

君はそれを喜んでいたけれど、
僕には、あの感じが、
少しだけ怖かった。

退いていく波のような誰かに、
君を連れ去られていってしまう、
そんな錯覚を呼び起こされたから。

熱性けいれん

君は一度、
四十一度もの高熱を出して、
痙攣しながら意識を失ったことがある。
ブルブル震えて、
口から泡をふいて、
白目をむいて青くなっていた君を、
パパは今も、
少しも忘れられずにいる。
あれから、もう二年にもなるのにね。

あるときパパはね、

正直、もう君と、

永遠のお別れなんじゃないかと思った。

病院に向かう車の中で、

必死にその小さな体を抱いて、

息をしないように思えた、

君の口に、何度も何度も、

自分の息を吹き入れた。

君はそれでも一向に目を覚まさず、

そんな君を見て、

僕の頭は真っ白になった。

訳も分からず、ただただ、

「死なせてたまるか！」

「死なせてたまるか！」

そう繰り返し叫ぶばかりだった。

このとき車を運転していたママは、

せめて、自分だけでも冷静でいようと、

固くハンドルを握っていたそうだ。

女の人は強い。

そんなママのおかげで僕らは、

どうにか病院へと、

到着することが出来た。

パパは走り、受付で叫んだ。

「子供の様子がおかしいんです！

お願いですから、

今すぐに見てください！」

こんなにも自分が必死だった瞬間を、

生まれてこのかた、

パパは一度たりとも知らない。

その必死さが伝わったのか、

君は、すぐに診察台に乗せられた。

そして三人もの医師が、

同時に君のことを取り囲む。

けれども医師たちは、
明確な診断をくだせず、
それぞれの思う所を言い合っているうちに、
一時は、髄膜炎なんていう、
恐ろしい病名まで出てきたほどだった。

でも、何かの注射をされて、
君は、ついに目をあけた。
パパにとっては、
奇跡のような瞬間だった。

君の病名は熱性けいれん。
いわゆる引き付けというやつだ。
でも病名などはどうでもいい。
なんにせよ、君は目を開けたのだ。
目を開けてくれたのだ。

僕はこのときの喜びに、
自分の命を捧げてしまっても、
一向に構わないぐらいだった。

僕は、この日の感動を、
それから二年も経った今も、
生々しいぐらいにハッキリ覚えている。

だから日々の生活のなかで、
何かしら不愉快な目に遭ったとしても、
「あの日に君が死んでしまったのなら、
僕は、もっとずっと深い悲しみの淵に、
今も呻きながら沈みきっていたに違いない」
と思えば、

その不愉快なことさえ、
むしろ、愛しく愉快的な事のように感じられる。

それはつまり、
今も君が生きているという事実が、
僕ら家族の生活に、

つねに幸せの色彩を添えているということ。
ときに暗澹たる思いをせざるを得ない人生に、
つねに明るい色のヴェールを、
覆いかけてくれるということ。
そういう事なんだと思う。

だから僕たちは、どんな時にも、
ほんの少しの幸せだけは、決して、
この胸から失われずに済んでいるんだ。
それだから君に、
心からお礼を言わずにはいられない。
ありがとう、
あのとき戻ってきてくれて。

歴代誌

君が生まれる前には、
自分に子供が出来るという事態に、
ただただ不安ばかりを覚えた。

君が生まれた瞬間、
「あれ、かわいいな」と思った。

君が生まれて一月、
もう、かけがえのない存在になっていた。

それから半年が過ぎると、
夢中で愛するようになった。

一年目で、手放すのが怖くなり、
二年目で君は、
僕の憧れの人になった。

そして三年目がきて、
僕はこうして、
君についての詩を、
いくつも書かずにはいられなくなった。

第5章 詩人として

詩のミューズに捧げる歌

ミューズよ、芸術を司る女神よ、

謹んであなたにお伺いします。

ときに女神よ、

詩人が詩を歌うためには、

きつと喜びと悲しみの、

その両方ともが必要なのではないのでしょうか。

愛する喜び、

愛する気持ちが相手に通じる喜び、

愛を育む喜び、

愛を営んでいく喜び。

そして愛が終わる悲しみ、

もう愛することが出来ない悲しみ、

愛が枯れ果てる悲しみ、

そして何より、

愛する人と別れる悲しみ。

詩人の歌心は、

これら愛の喜びと、

別れの悲しみを両端とし、

その狭間の空間をさ迷いながら、

不安定な感情をたゆたわせつつ、

ときに不浄な激情に駆られながら、

育まれていくものではないでしょうか。

私もまたかつては、

かつてさすらいの時代には、

この心、

たしかに愛と別れの狭間に、

喜びと悲しみの狭間にありました。

そして、その時代には、

詩心はとめどなく私の中から迸り、
筆は楽々と、
どこまでも、どこまでも、
詩となるべき文字を、
書き連ねていきました。

けれども私は、
もうずっと詩を書いていない。
長いあいだ、
書こうという気持ちすら起きませんでした。
というのも、

私のポエジー（詩情）は根元から枯渇し、
かつて詩人だった男の関心は、
なんと、散文的で哲学的な思索へと、
すっかり移行してしまっていたのです。

つまり詩人は、
長らく哲学者となっていました。
ミューズ（芸術の女神）よりも、
ソフィア（学問の女神）を、より強く、
崇める者となってしまっていたのです。
ミューズよ、あなた様の顔も、もう、
かけらほども思い出せなくなってしまったような、
そんな気さえします。

いや、私は時には詩を書きました。
そう、物語詩や叙事詩（小説）ならば、
私はいつだって、
それを書くことが出来るのです。
書こうと思ったときに、
それを書くことが出来るのです。

けれど、
叙情詩だけは書けなかった。
情感と情熱を叙述する詩だけは書けなかった。
だって実際に心が揺らめく事もないのに、

叙情詩を書いたりしてしまったら、

その詩はもはや、そうもはや、

単なる文字と韻律の遊びにしかなりはしません。

叙情詩の世界こそは、

韻律よりもはるかに、

詩情が言葉を詩たらしめる世界であるのに。

なのに、その世界の中に、詩情を、

心の揺らめきを持たないで踏み込んだりしたら、

最悪と言っているほどの、

あなた様への、ミューズへの、

冒涇となってしまうではありませんか。

では、何故そうなってしまったのか。

どうして私は、詩情を失ってしまったのか。

何ゆえ私は、

心の揺らめきを忘れてしまったのか。

その答えは、私が、

「別れる必要のない女性」と、

結ばれてしまったからに他なりません。

彼女は、私の妻です。

私は結婚したのです。

白いチャペルの中、

神聖なる十字架の前で、私は、

彼女ととこしえに共にあることを誓ったのです。

ゆえに私は、彼女と別れる必要はなく、

となれば、別れの悲しみを味わう必要も、

また全くありません。

事実、

もし私たちを別離させるものがあるとすれば、

それはきつと、

互いの死だけでありましょう。

そしてまた、

まだ若い私たちにとってみれば、
かかる『死』は、
全くリアルなものではありません。
つまりそれは、

『死』は、心理的には、
私たちにとって、

存在しないに等しいという事です。

ええ、老いてゆけば、

また事実としては、無論それは、
存在するものでありましようが。

その結果、

私たちには愛の喜びだけがあり、
別れの悲しみは彼岸にあって見えない、
そんな状態になってしまいました。

ために、この心は、

僅かだにも揺らぐ事をやめて固定し、
もはや悲しみのない世界に、
安住しきってしまったのです。

おお、けれど、けれども私は、
ここに再び、ミューズよ、

あなた様に出会ふ幸せに恵まれました。

それは何故か。

娘と出会ったからです。彼女は、
いまや私にとって最愛の存在です。

そして将来、

どこかの誰かとの結婚によって、
私と別れることを運命づけられた存在です。

つまり彼女は、

私に人を愛する喜びをもたらし、
同時に別れの悲しみをも、

私にもたらす女性なのです。

まさに喜びと悲しみの両方を包含した存在、
それが私の娘であるのです。

それゆえ娘と巡りあった今、
私は詩人としてよみがえり、
ここに、多くの詩を綴る事になるでしょう。
愛しい娘のことを想って描く詩と、
別れるべく運命づけられた娘を想って描く詩を。

おお女神よ、
私は謹んでそれらの詩を、
その詩のすべてを、
あなた様に捧げることを誓います。

ミューズよ、出来うるならば、
どうかその詩を、
私の喜びと悲しみの全てを、
その羽毛のように柔らかな、
慈しみの大海のうちに、
一つ残らずご嘉納なさらんことを。

※この詩が、
本書のなかで最初に書かれた詩です。

創作の泉

不思議だね、
本当に不思議だね、
子供なんか出来たら、
もう創作なんか、
二度と出来なくなると、
ずっとそう思ってた。

でもごらん、
見てのとおり、
いま君は僕にとって、
尽きることを知らぬ、
創作欲の泉となっている。
不思議だね、
本当に不思議だね。

第6章 愛しい君へ

学びの場

愛おしい。

愛しすぎて胸が痛いぐらいだ。
愛おしい。

だから僕は君に、
とめどなく愛を注ぐ。

でもその愛は、
君から僕へと返ってくることはない。
僕がママを愛したときに、
ママが僕を愛し返してくれたようには。

それでも愛おしい。
だから僕は君に、
限らない愛を注ぐ。

ああ、神さま、
こうして男は学ぶのでしょうか。
無償の愛ということを。
ほとんど宗教的なまでの愛を。
こんなにも小さな人間関係の中で。

父と娘という小さな輪の中で。

そのときまで

守ってあげる。
いつだって、

守ってあげる。
どこにいたって、
守ってあげる。

パパのかわりに、
君を守ってくれる、
その人が現れるまで。

君の信頼

僕が手を広げると、
いや、手を広げなくても君は、
僕が即座にその身体を支えないことには、
高いところから落ちてしまいそうな場面でも、
僕の手の支えを信じきって、
この胸に飛び込んできてしまう。

そんなに僕を信頼していいの？
だって僕は、
これまで幾度となく、
人からの信頼を無碍にして、
その人を傷つけては、
その心の痛みを気にもかけなかった。
そういう残酷な過ちを、
何度も何度も繰り返してきたんだよ。

ああでも……そうだね、
けれど君の信頼に対してだけは――
何の保証も立てることなく、
僕の胸に飛び込んでくる君に対してだけは――
一生を通して、
そんな過ちを犯さないだろう。

君の笑顔を見たら、
そう確信せずにはいられない。
僕のことを信じ切って笑う顔を。
僕を疑うことなど知らない顔を。

走れ！

君は保育園でも一二を争うほど足が速いので、
家族の中でも、
君に追いつけるのは、
唯一パパだけになってしまった。
おじいちゃんも、
おばあちゃんも、
そしてママさえも、
君には追いつけない。

でもいつか、パパですら、
君に追いつけなくなる。
その足にも、その人生にも。

いや、それでいいんだ。
どこまでも走れ！
どこまでも遠くまで走れ！
君の人生を。
君だけの人生を！

君が笑うと

君が笑うと世界が笑う。
君が笑うと光が満ちる。
君が笑うと力が溢れる。
君が笑うと僕が笑う。
僕が笑うと君が笑う。

心を広げるもの

別れる悲しみを味わうのが怖いから、
だから人を愛しすぎないようにするだって？
悪いけれど、
あなたが言っていることは、
まるで卑怯者の言い訳のようじゃないか。

そうじゃないよ、
そうじゃないよ、
たとえば、どんなに辛くても。

僕たちは、大いに愛して、
大いに悲しむべきなんだ。
天国のように喜んで、
地獄のように悲しむべきなんだ。
それこそが人としての、
本当の生き方だ。

そうやって生きていくことで、
人の心は上に高まり、

下に深まり、
そう、どこまでも、
どこまでも大きくなっていく。

ひるがえって卑怯者の心を見てみよ。
愛しもせず、
悲しみもしない彼らの心は、
高まりもせず、
深まりもせず、
小さく縮こまってしまつて。
もう、自分一人分のスペースしか、
なくなつてしまつている。

その芥子粒のような容器（心）では、
きっと、どんなドラマも容れられないだろう。
まったく、
なんて退屈な人生だ！

君の顔

自分に負けそうになるとき、
誘惑に負けそうになるとき、
決まつて君の顔が心に浮かぶ。
そして、その顔が、
自分を律する力になる。
君が僕の道徳になる。

恋文

拝啓、お元気ですか？

僕は君のことばかりを想って、

昨日、今日とを生きています。

きっと明日もそうでしょう。

君は、こんな僕の気持ちを知ってか知らずか、

僕の前で、

今日もまた誘惑的な笑顔を撒き散らし、

その笑顔のすぐ隣にいる僕を、

ますます君に、夢中にさせていきます。

君には、好きな人がいますか。

僕のことを、どう思っていますか？

僕のが好きですか？

たしかに以前、

僕を好きだと言ってくれましたが、

それは本心からのものですか？

君の「好き」は、

わりあい内容が軽いので、

僕は、ほんのちょっとだけ、

君の言葉を、心許なく思います。

そういえば以前、

「パパのことが大好きなの」

と言ったあとに、

「三角が好きなの」

「風船が好きなの」

と言葉が続いた時には、

思わず絶句してしまいました。

けれども、

君が僕のことをどう思っているように、

それが一体なんだというのでしょう。

君がどんな本心を持っていたとしても、

僕には、君を嫌うことなど到底できません。

むしろ僕には、

君を好きだという気持ちを、

心の脇のほうに、

「少しのあいだけ」

「ほんのちよつとだけ」

寄せて置いておくことすら出来ないのです。

そうです、君を好きだという気持ちは、

いつでも僕の心の本流として、

尽きることなく、

滔々と流れているのです。

これは血のつながいのせいですか？

それとも、

魂のつながりのせいなのでしょうか？

あまりにも強すぎる執着が、

僕を君に結びつけているように、

思われてなりません。

正直に言えば僕は、

君を自分だけのものにしたいと、

そこまで思いつめているのです。

ああ、でも知っています。

未来の君が、僕のまえに、

君にとって、僕よりも大切な、

僕よりも大好きな誰かを連れてきて、

「これが私の恋人です」

あるいは、

「これが私の夫となる人です」

と言うことを。

僕はそのとき失恋するのでしょう。

君はそのとき、

僕から離れていくのでしょう。

その後ろ姿を僕は、
ただ黙って見送るしかないでしょう。
君はもう、僕のほうを振り返ることもなく、
彼と一緒に、
前だけを見て生きていくのでしょうか。
そんな将来のことを考えると、今この時も、
辛くて涙が出そうになります。

けれど、ああ、けれどけれど、
僕の涙が一体なんだというのでしょうか。
それが一体なんだというのでしょうか。
僕が自分自身の幸せと、
君の幸せとを秤にかけたならば、
どうして君の幸せのほうを、
優先させずにおけるでしょうか。
こんなにも君を愛しているのに。
こんなにも君の幸せを願っているのに。

ああ、だから君よ、
とき来たらば、どうか、
どうか僕の傍から遠く離れよ。
君の幸せのために。
君が幸せであることが、
他の何よりも嬉しい僕のために。
君の笑顔は僕の寂しさに勝り、
君の喜びは僕の悲しみに勝る。
だからさよなら、愛しい人、
いつまでも変わることなく、
永遠に愛しい人。

変わるものと変わらないもの

昨日はパパが嫌いと言い、
今日はパパが好きと言う。
昨日はパパじゃないと言い、
今日はパパ行っちゃイヤと言う。
君の言葉はコロコロ変わる。
ただパパの想いだけが変わらない。
ずっと君が好き。

世のお父さんたちへ

我ながら、実に滑稽なことを書いてきたと思う。
自分の娘に恋をして、
その想いを詩文にしたためるなんて、
本当に、実に滑稽で馬鹿々々しい話だ。
けれど、
文字にしたかどうかはともかく、
この馬鹿々々しい想いが、
僕一人だけの特殊なものではない事を、
僕は確かに知っている。

そうだよ、
世のお父さんたち、
娘を持つお父さんたち、
さあ、この気持ちを共有して語らおうよ。
この馬鹿々々しい想いを。
この涙が出るほど切ない想いを。

娘へのラブレター

著 者 正道

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
